

接続助詞と接続詞に関する一考察

加藤陽子

日本語プログラム

国際大学

Abstract

This paper argues a difference and a similarity between conjunctive auxiliaries and conjunctions from a syntactical point of view. This study examines the conjunctive auxiliaries that are similar to Minami(1974) dealt with, and conjunctions that correspond to them morphologically.

The main difference between the two is the number of relational meanings that are formed by preceding and following sentences or clauses. Conjunctive auxiliaries can combine several types of two clauses into a sentence: On the other hand, the relational meaning that is produced by combining two sentences with conjunctions is limited to fewer meaning than that of conjunctive auxiliaries in order to clarify the relation between the sentences.

The similarity between the conjunctive auxiliaries and conjunctions is derived from a function that they share, i.e., the function to connect sentences or clauses. However, the types of the sentence/clause that one conjunctive auxiliary/conjunction can combine are limited. Therefore, some sentences restrict the modality of the main clause. For instance, "Kimi wa bokunokoto o wakatteinainONI damare!" is ungrammatical because conjunctive auxiliary "NONI" doesn't accord with deontic modality such as imperative. Conjunction "DANONI" which corresponds to "NONI" morphologically behaves just like "NONI." The sequence of the following sentences is not also acceptable because the second sentence which starts "DANONI" doesn't accord with imperative modality. "Kimi wa bokunokoto o wakatteinai. DANONI damare!"

As described above, this study clarifies the relationship of conjunctive auxiliaries and conjunctions through examining the connecting function that both of them share.

1. はじめに

思考内容を表現し、伝達するためには、まず、語を使って現実の世界に存在する事象を表すことが必要となる。しかし、伝達する内容が複雑になればなるほど、それを単独で使うことは希で、語と語を連結して節とし、節と節を結び文とし、文と文を有機的につなげて文章を作るなど、単位と単位を関係づけてより大きい単位を作り、それを用いることが必要となる。そこで、名詞と述語を関係づける格助詞、節と節を結ぶ接続助詞、文と文を結ぶ接続詞等が単位の拡張の為の欠くべからざる要素となる。

それらのうちでも接続詞は論理関係を明確にするために、歴史的に接続助詞や副詞から転成したり、他品詞（動詞・形式名詞・指示語等）に接続助詞がついてできたという経緯

がある。例えば、下記①では、① a のように、「が」を接続助詞として用いても、① b のように接続詞として用いても、前者が節と節をつなぐ一文中で働く要素であり、後者が文と文をつなぐ二文を関係付けるものとして働くという機能的差異以外に、大きな違いは見られない。

- ① a 彼を訪ねたが、あいにく留守だった。
b 彼を訪ねた。が、あいにく留守だった。

接続助詞と接続詞に関してこれまでの研究で明らかにされてきたことは、それらの形態的・意味的な連続性が中心であったようである。しかし、これら二つの異同及びこれらがどのような要素を結び付けるのか（反対に、結び付けないのか）といった構文論的な観点からは、十分な考察がなされているとは言い難い状況にある。

本稿では、接続詞と接続助詞を連続性のあるものとしては捉えるが、共通点と差異の両方を観察することによって、それらの連続と非連続の様、つまり、接続助詞あるいは接続詞を使って二つの単位を結び付けるということがどのようなものなのか、を観察する。

(注1)

2. 接続助詞についての先行研究

本稿で考察する接続助詞と接続詞の異同に関して注目すべき研究に、南(1974)がある。

南(1974)は、直接この問題を取り上げたものではないが、接続助詞等を含む複文の階層性を指摘したものである。この研究では、従属節内部に出現する文法的カテゴリーの種類と数を観察することによって、主節への依存度が高い従属節と、主節からの依存度が低く、一文に近い様相を見せる従属節までが段階的に分類されている。接続助詞等から成る従属節は、従属節の主節への依存度（以下「従属度」）によってA類・B類・C類という三つのグループに分けることができ、その順番で従属度が低くなり、従属節が一文に近い要素になるとされているのである。

この研究を基礎に、拙稿(1992)では、「主節のモダリティと複文の従属度との関係」という観点から、南(1974)で取り上げられた接続助詞等を含む複文の従属度を検証した。ここでは、主節末のモダリティのスコープを従属度を測る指標として取り上げ、(a)複文の節末に位置できるモダリティの種類（スコープの形態的基準）、(b)モダリティのスコープによる複文の構造（スコープの意味的基準）、の二つの観点から観察を行っている。

(a)は、主節末にどのようなモダリティが位置できるかを観察したものである。その際、モダリティを「カモシレナイ」や「ラシイ」などの、発話者の判断を表すようなモダリティ（以下「判断のモダリティ」）と、命令・依頼・意志等の、発話者が聞き手に働きかけたり、聞き手に実現の期待を表明するようなモダリティ（以下「実現期待のモダリティ」）に分けて、考察した。節末に位置することのできるモダリティの種類と数は、接続助詞によって異なる。節末に位置するモダリティの制限が多いものから、比較的少ないものまで様々である。文が文として成立する為に「命題」とそれを外側から包む「モダリティ」が

必要なことを考えれば、このように、節末に、より多種類のモダリティが位置できる節は、節としての従属度が低く（独立度が高く）、より一文に近い存在として位置づけることができる。

(b)は、主節末のモダリティがどこまでの命題をそのスコープとするかに注目したものである。対象となる複文が、主節末のモダリティスコープが主節と従属節の両命題に及ぶ構造（ α 構造）と、主節の命題にしか及ばない構造（ β 構造）との、どちらの構造を取るかを観察している。判断と実現期待の各モダリティがついた場合の α 構造・ β 構造の分布を観察し、 α 構造の分布の多い複文の従属節を従属度が高いもの、 β 構造の分布の多い従属節を従属度の低いものとみなした。

この、(a)と(b)を基準とした観察の結果をまとめると以下のような表になる。

これらの基準から、①～⑩までをⅠ類、⑪～⑬をⅡ類、⑭～⑳をⅢ類と分類し、Ⅰ類からⅢ類の順番で従属度が低くなり一文に近い要素を備えたものになっていくものと考えた。

	対象とする接続辞 (一部南(1974)と異なる)	意味的基準 注2参照	形態的基準			
			従属節末モダリティ		主節末のモダリティ	
			判断	実現期待	判断	実現期待
①	ト・ハ... (恒常条件)	(ア)	△*	X	▲	X
②	ナガラ1		X	X	○	○
③	ツツ		X	X	○	○
④	連用形反復		X	X	○	○
⑤	連用1 (述語adj)		X	X	○	○
⑥	テ1 (付帯状況)	(イ)	X	X	○	○
⑦	ナイデ		X	X	○	○
⑧	ズ・ズニ		X	X	○	○
⑨	ナガラ2	(ウ)	X	X	○	○
⑩	テ2 (継起)		X	X	○	○
⑪	タト (時)		△*	X	○	○ [ⓐ]
⑫	タラ・ナラ・ハ (仮定条件)	(エ)	△	X	○	○
⑬	テモ		△	X	○	○
⑭	連用形2 (理由)		△	X	○*	X
⑮	テ3 (理由)		△	X	○*	X
⑯	シ (並列)	(オ)	○	X	○	X
⑰	テ4 (並列)		○	X	○	X
⑱	ハ・タト (慣用表現)		△ [ⓐ]	X	○	○ [ⓐ]
⑲	ノニ		△	X	○	▽
⑳	ノデ		△	X	○	○
㉑	カラ		○	X	○	○
㉒	シ (理由取り立て)	(カ)	○	X	○	○
㉓	ガ (逆接)		○	X	○	○
㉔	ケレドモ (逆接)		○	X	○	○
㉕	ガ (前置き)		○	X	○	○
㉖	ケレドモ (前置き)		○	X	○	○

表1

○/x→当該のモダリティが位置できる/位置できない

○→希望のモダリティ「タイ」のみ位置できない ○a→「ト」にのみ個別のモダリティ制限有り(詳細は5・1参照)

△→「マイ・ダロウ」が位置できない ▽→一部モダリティ制限あり(詳細は5・1参照)

▲→確言のモダリティのみ位置可能 △a→△より更に制限が強く、「ト」の場合のみ確言のモダリティだけが位置可能

3. 接続助詞を含む複文の従属度と接続詞との関係

2節では、接続助詞が皆一様に同じ強さで節と節をつなぐのではなく、先行節と後行節のあいだの結びつきの強さは、その二つを結ぶ接続助詞の種類によって異なることを述べてきた。それでは、この、接続助詞によって節間の結びつきの強さが異なることと、接続詞との間にはどのような対応関係があるのだろうか。

下記表2は、I・II・III類に属する従属節を作る接続助詞等（表中(1)）と、例文①bのように、それらに形態的に対応する接続詞（表中(2)）を同じ表に示したものである。また、表中(1)であげた接続助詞が終止形（或いは連体形）に接続するものであるか否かを、同じく表中(3)に示した。

	(1)接続助詞等	(2)形態的対応の接続詞	(3)終止・連体形接続
I 類	ト・バ（恒常条件）	（トのみ○）	（トのみ○）
	ナガラ1（継続）	×	×
	ツツ	×	×
	テ1（付帯状況）	×	×
	連用形反復	×	×
	連用形1	×	×
	ズ（ズニ）	×	×
	ナイデ	×	×
	テ2（継起的動作）	×	×
	ナガラ2（逆接）	×	×
II 類	タラ・ト（時）	（トのみ○）	（トのみ○）
	ハ・タラ・ヲ（仮定条件）	×	×
	テモ	×	×
III 類	テ3（原因・理由）	×	×
	連用形2（原因・理由）	×	×
	シ（並列）	×	○
	ノデ	×	○
	ノニ	△（ナニ・ダに等）	○
	ハ・タラ・ト（慣用表現）	×	（トのみ○）
	ガ（逆接・前置き）	○	○
	ケレドモ（逆接・前置き）	○	○
	カラ	△（ダカラ等）	○
	シ（理由取り立て）	×	○
テ4	×	×	

表2

表中(2)の○は、当該の形式が存在すること、×は存在しないことを表す。△は、他の要素を伴えば、当該の形式が存在することを示す。

表中(3)の○は、(1)の接続助詞等が述語の終止形或いは連体形に接続すること、×はしないことを表す。

本表の(1)(2)からわかることは、節としての独立度が高い（従属度が低い）と考えられるIII類に、形態的に対応する接続詞が多く存在していることである。従属度の低い従属節は、反対に節としての独立の高さによって、接続助詞の手前で節としてというより一文に近い単位としての完結性を持つことができ、切り離された接続助詞は、接続詞として機能

できるようになるといえる。

また、表1の(2)(3)を比較すると、終止形(連体形)接続という形態的な特徴が、接続助詞に対応する接続詞の有無に大きく関わっているということがわかる。例文①aと①bのように、接続助詞を、形態的に大きな変化を加えないでそのまま接続詞として機能させる為には、その接続助詞が、述語の終止形か連体形に接続するものでなければならない。その点から観察すると、(2)で○のついた接続詞に対応する(1)の接続助詞等は、皆、終止形または連体形に接続することがわかる。

このことから、対応する接続詞を持つ接続助詞は、それを用いた場合、節としての独立度が高く、終止形か連体形に接続するという二つの特徴を兼ね備えたものであることがわかる。本稿では、表2で取り上げられている、述語の活用形及び接続助詞(表2の(1))を主な考察の対象とし、それらと、対応する接続詞(表2の(2))の関連を考察したい。次節から、これらの差異・及び連続性を、順を追って、述べていく。

最後に、終止形或いは連体形に接続する接続助詞(表2(3))と、その接続助詞に形態的に対応する接続詞(表2(2))との関係を、形態的な観点から分類しておく。これは次のように三つに分けることができる。

(あ) 単独でも、前接する要素と共にでも、形態的に対応する接続詞がある接続助詞

あ1: 動詞が前接するもの……「ト」(スルト/ト)

あ2: 判定詞「ダ(デス)」が前接するもの……「ガ・ケレド(モ)」

(デスガ/ダガ/ガ) (デスケレド(モ)/ダケレド(モ)/ケレド(モ))

(い) 「ナ」及び/或いは「ダ(デス)」が前接しないと形態的に対応する接続詞として機能しない接続助詞(表2(2)の△)

……「ノニ」(ナノニ/ダノニ/デスノニ)「カラ」(ダカラ/デスカラ)

(う) 形態的に対応する接続詞をもたない接続助詞

シ・ノデ

4. 接続詞で結ばれた二文と接続助詞で結ばれた一文との差異

……「複数の接続の意味関係」との対応

本節では、接続詞と接続助詞との差異を、接続の意味関係を中心に考察してみたい。

複数の接続の意味関係を実現できる接続助詞とそれに対応する接続詞を観察すると、接続助詞で実現できた意味関係と同じ意味関係をもつものとして接続詞が使われない場合もあることがわかる。例えば、「と」は、接続助詞として使われた場合、前後節の種類によって、恒常的な条件(②a)仮定的な条件(③a)継起的動作(④a)発見の契機(⑤a)など、様々な接続の意味タイプを持った文を実現させる。(注3)

②a 2に2をたすと4になる。

b *2に2をたすと、4になる。

- ③ a 彼女が社長の娘だとすると、ことはやっかになるぞ。
 b *彼女が社長の娘だとすると、ことはやっかになるぞ。
- ④ a 「疲れた」と子供が言うと、母は子を背負って、山道を登っていく。
 b 「疲れた」と子供が言う。と、母は子を背負って、山道を登っていく。
- ⑤ a 現場に駆けつけると、そこは水浸しだった。
 b 現場に駆けつけた。と、そこは水浸しだった。

しかしそれを接続詞として使った例(②b~⑤b)を見てもわかるように、②b・③bでは、「と」を後続文の文頭に持ってくると、文のつながりが不適當になってしまう。これは、接続詞「と」が、前後件の間に時間的な隔たりがほとんどなく後件が継起的に生起する場合のみの使用に用法が限定されるからである。接続詞は、前後の文をある一定の関係で結ぶ(後続成分に、ある意味関係のものを誘導する)、という機能を果たす。一つの形態に、複数の異なった関係で前文と後文を関係づけるという機能が対応していたら、文と文との関係が明確にならず、接続詞の関係表示の機能を果たすことができなくなるのである。表2の(2)の「恒常条件」「時」「慣用表現」の項は「と」を含んでいるので、形態的に対応する接続詞があるものとして、○がついている。しかし、形態的に対応する接続詞が存在するという事実と、その形態が、接続助詞で実現された接続の关系的意味を表す接続詞として使われるということとは、別である。

また、「ガ・ケレド(モ)」の用法にも、同様のことが観察できる。これらは論理的に逆接的な節と節、一文と一文を接続するのに使われる場合(逆接の用法)と、それらが逆接的な論理関係を表すのではなく、⑥aのように先行節が後行節の前置きの事態を表す場合(前置きの用法)がある。⑥aのような前置きの用法の場合に、「ガ」や「ケレドモ」を接続詞として使用すると、⑥bのように、二文のつながりが不適當な文になるのである。

- ⑥ a タクシーが着いたんだけど、先に乗ってくれない?
 b *タクシーが着いたんだ。けど、先に乗ってくれない?

この点からも、形態的には対応する接続詞があっても、意味的にそれが制限される場合があることがわかる。

塚原(1969:73)は、接続助詞と接続詞の違いを次のように述べている。

すなわち、接続詞の連接は、単位を、分離したままで関係づける機能である。

そして、接続助詞の連接は、関係づけることによって単位を癒着する機能である。

ここにも述べられているように、接続詞は、完結性を持った二つの文を関係づける形式である。結ばれるべき二つの事態の内実が同様である場合でも、節をつないで一文で表す場合と、完結性を持った二文をつなぐ場合とでは、結ばれる単位の完結性のあり方が違う。つまり、接続助詞は、先行節の情報を受け継ぎ、後行節の情報を付け足して一文として完

結させるための繋ぎ役として機能するが、接続詞は、一旦完結した文と文を結び付けることになるので、文と文の接続関係を強く示すマーカーとしての機能が要求される。従って、完結した文をつなぐ接続詞は、「決められた接続の意味関係を、明確に表す」ために、一つの形態で、接続助詞に見られるほど多岐な接続の意味関係を表示することはないのである。この点が、形態的に共通部分を持ち、接続という機能を共有する接続詞と接続助詞との差異として挙げられることであろう。

次に、次節では、接続詞と接続助詞の連続性を示す事象を考察して行きたい。

5. 接続助詞で結ばれた一文と接続詞で結ばれた二文との連続性

5・1 主節末及び後続文の文末の共通したモダリティ制限

ここでは、接続詞と接続助詞の連続性を示す構文的な現象について述べてみたい。

接続助詞を使った文の中には、2節表1で示したように、文末に位置するモダリティの種類が制限されるものがある。例えば、以下の例文⑦の接続助詞「と」は、依頼・命令等の、聞き手に働きかける力の強いモダリティを文末に取らない。また、例文⑧の接続助詞「のに」も、同じく依頼・命令等のモダリティを取らない。(注4)

- ⑦ a 彼が訪ねて来ると、いつもあの喫茶店に行きます。
b *彼が訪ねて来ると、あの喫茶店に行きなさい／行って下さい／行くな／行こう。
- ⑧ a 君は僕のことをよくわかっていないのに、いつも僕を批判する。
b *君は僕のことをよくわかっていないのに、だまれ／だまってください。

このようなモダリティの制限は、⑦ b⑧ bの様に接続助詞を使った時ばかりでなく、接続助詞に形態的に対応する接続詞を用いた場合にも見られる制限である。⑨ b・⑨ c・⑩ bから、これらが二文の連続としては適当でないことがわかる。

- ⑨ a *彼が訪ねて来ると、あの喫茶店に行ってください。
b *彼が訪ねて来る。と、あの喫茶店に行ってください。
c *彼が訪ねて来る。すると、あの喫茶店に行ってください。
d 彼が訪ねて来る。あの喫茶店に行ってください。
- ⑩ a *君は僕のことをよくわかっていないのに、だまれ。
b *君は僕のことをよくわかっていない。なのに、だまれ。
c 君は僕のことをよくわかっていない。だまれ。

ここから、接続助詞で結んだ一文が節末のモダリティ制限により文法的に許容されない時は、形態的に対応する接続詞でつないだ二文にも、整合性がないことがわかる。⑨ b・

cでは、「と／すると」⑩bでは「なのに」の存在が、後続文のモダリティを制限していることがわかる。⑨dや⑩cのように、接続詞を使わない文は、先行文と後行文の論理関係を明確にしないが、（彼が訪ねて来るカラ？／ナラバ？／ケレドモ？あの喫茶店に行ってください）二つの文のつながりは、文脈から解釈可能であり、整合しているからである。これらは、接続助詞と接続詞の強い連続性を表していると考えられる。複文で主節末のモダリティ制限がない⑪aのような例文は、⑪bのように、対応する接続詞を用い二文を結んでも後続文にモダリティ制限はなく、整合性のある連文の流れになっている。

- ⑪a 私はここにいるが、おまえは先にいけ。
- b 私はここにいる。が、おまえは先にいけ。

5・2 終止形に接続しない他の接続助詞と接続詞のモダリティ制限

5・1まで、表2で扱った接続助詞と、それに対応する接続詞との関係を考えて。それでは、次に2節（あ）（い）で観察した終止形接続の接続助詞以外でも、5・1で観察した連文間の後文のモダリティ制限があるものを観察して行く。

理由を表すテ形（テ3）を節と節とを接続するものとして扱った⑫bでは、後続節に意志・命令等のモダリティが位置できない。これと同様に、テ形を使わず、接続詞「それで」を使った⑫dも、二文の連続として適切ではない。後続文には、疑問文や命令文などが位置せず、⑫cのように、先行文を理由として起こった事態を叙述する文が来なければならない。

- ⑫a 風邪をひいて、医者に行った。
- b * 風邪をひいて、医者に行け。
- c 風邪をひいた。それで、医者に行った。
- d * 風邪をひいた。それで、医者に行け。

また、条件を表す接続助詞「バ」を使った複文の文末にもモダリティ制約が見られる。「バ」は、従属節の述語が動作性述語の場合、（⑬aの「留学する」等）主節末に命令・希望等のモダリティをとることができない。

- ⑬a 留学すれば、日本語がじょうずになる。（稲葉(1990)）
- b * 留学すれば、日本語を勉強しなさい。

これと同様、「そうすれば」という接続連語的なものを接続詞的に使い、二つの文をつないだ場合も、前文の述語が動作性のものであった場合、二文のつながりは整合性をもたない。（注5）

- ⑭a 留学する。そうすれば、日本語がじょうずになる。
- b * 留学する。そうすれば、日本語を勉強しなさい。

このように、接続助詞を用いた場合に働いた後続節末のモダリティ制限が、対応する接続詞を使って接続した二文の後続文のモダリティにも適用されるということは、接続助詞と接続詞の連続した側面を表している。換言すれば、これらは、「決まった関係にある二つの要素を結び付ける」という「接続」機能を共有しているため、決まった関係以外の二つの単位を結ぶ際、先行要素と後行要素との結びつきが制限されてしまうのである。

5・3 接続の意味とモダリティ制限

本節では、接続助詞と接続詞の共通したモダリティ制限について考察を進めてきた。5・1では、3節の(あ)・(い)で挙げたような、接続助詞と形態的に対応する接続詞とに共通するモダリティ制限を観察した。5・2では、主節末のモダリティ制限がある接続助詞と、それに対応する指示語を含む接続連語的な接続詞との間のモダリティ制限を観察した。

この5・3で観察するのは、3節で(う)として分類した接続助詞「シ」である。この「シ」は、終止形に接続するものでありながら、「ガ」や「カラ」のように形態的に対応する接続詞をもたず、その上主節末にモダリティ制限がある、という特徴を持った接続助詞である。

「シ」には、同値の要素を並列的に並べるという用法(並列)と、理由のうちの幾つかを取り立てて並べるという用法(理由取り立て)がある。そのうち、並列の用法を持つ場合には、⑮bの様に「禁止・命令・依頼などの働きかけの強いモダリティを主節末に位置させることができない」というモダリティ制限が存在する。(注6)

この趣味の会はとてもおもしろい。

⑮a 多方面から色々な人が集まるし、皆よく飲むし、陽気に歌う。

b *多方面から色々な人が集まるし、皆よく飲むし、陽気に歌え／歌おう／歌って。

「シ」は、形態的に対応する接続詞や接続連語的なものを持たない。しかし、形態上は類似してはいないが「並列」という機能を持つ「そして」等の接続詞を考えた場合、主節末にも「シ」と同様のモダリティ制限があることがわかる。

この趣味の会はとてもおもしろい。

⑮a 多方面から色々な人が集まる。そして、皆よく飲む。そして、陽気に歌う。

b 多方面から色々な人が集まる。そして、皆よく飲む。

*そして、陽気に歌え／歌おう／歌ってください。

市川(1978)にも、同様の指摘があるが、並列的な接続詞の中にはモダリティ制限があるものがある。「並列」という、ある一つの共通項に属する同質の単位をリストアップする機能は、叙述的なモダリティを要求し、命令などの働きかけの強いモダリティとはかみ合わないのである。このように、モダリティ制限は、繋がれてできる意味関係が要求する節や文などの単位の性質と深く関わっていることがわかる。この、接続の機能を持った二者

に共通するモダリティ制限という性質は、「接続」という機能が、ただやみくもに単位と単位を繋ぐのではなく、接続助詞・接続詞が決める意味関係に沿った単位を選択的に結ぶ機能であるということを示している。これは、この機能を共通に持つ接続詞と接続助詞との強い連続性を示しているのと同時に、「接続」という機能の本質的な一側面を表している、と考えられる。

5. まとめ

以上、接続詞と接続助詞との連続性と差異を考察してきた。本稿では、比較的節の従属度が低く一文に近い要素を持つ節同士を繋ぐ接続助詞と、それに形態的に対応する接続詞との関係を主に考察した。本稿では次の二点を述べた。第一点は、節を繋いで完結した一文という単位にすることと、完結した一文を繋ぐことの差である。それは、接続助詞と接続詞のそれぞれが実現する関係の意味の対応から明らかになった。第二点は、接続詞と接続助詞が、一方は一文の中で働き、一方が文と文の間で働くものという違いはあっても、両者が共通に持つ「接続」という機能を通して深く関係していることである。つまり、「接続」が、どんな要素も一律に繋ぐという機能ではなく、先行要素と後行要素の叙述の仕方と意味が適合するように繋ぐ、という選択的な機能だということである。これは、主節末・文末のモダリティ制限から明らかになった。

接続詞が後続文末のモダリティを規定するという事は、北野(1989)などでも述べられている。また、接続詞を、後続文末のモダリティ制限という観点から、体系整理を試みた研究もある(甲田(1994))。甲田(1994)では、接続詞も、南(1974)の文の階層性の属する四つの段階にそって分類できるという提案がなされているが、相互に連続したこれらが、どのような対応関係をなしているかは、今後の接続助詞等からなる接続節の複文の構文論的研究と接続詞による文の接続を考察する談話文法との協調的發展にかかっていると思われる。

今後は、双方から、精密かつ普遍性のある接続の問題に取り組んで行きたいと考える。

注

1. 本稿では、接続助詞と形態的に対応した接続詞を中心に考察するため、佐治(1970)で「文の内側の接続詞」と呼ばれるもの、つまり名詞と名詞を結び付ける「並立の接続詞」(また・及び・並びに・または・ないしは等)や、「列叙の接続詞」(おまけに・しかも・そのうえ)等は考察の対象にはしない。
2. 表1中、(ア)~(オ)は、次のようなモダリティ分布のパターンを表す。

- (ア) 判断のモダリティが α 構造で、実現期待のモダリティを主節末にとらないもの。
- (イ) 判断のモダリティ・実現期待のモダリティともに α 構造をとるもの。
- (ウ) 判断のモダリティが $\alpha \cdot \beta$ 両方の構造を持ち、実現期待のモダリティが α 構造のみをもつもの。
- (エ) 判断のモダリティが α 構造、実現期待のモダリティが β 構造をもつもの
- (オ) 判断のモダリティが β 構造で、実現期待のモダリティを主節末にとらないもの。
- (カ) 判断のモダリティ・実現期待のモダリティともに β 構造をとるもの。
- (キ) 従属節全体が主節のモダリティ成分になってしまうもの

3. 接続助詞「ト」の意味分類は、横林・下村(1988)を参考に行った。

4. このモダリティ制約は、各接続助詞毎に細かい差異が見られ、必ずしも働きかけの強いモダリティ全てが文末に位置できないとは限らない。例えば、「ト」は、禁止の「ナ」というモダリティを文末に取れないが、「ノニ」は取れる。

* 揺れを感じると、エレベーターを使うな。
わかっていないのにわかった風な口をきくな。

5. 「仮定的な条件→帰結」において、先行節が仮定条件であることは、複文では表せるが、これを㉔bの先行文の様に一つの文で表すと、仮定的な意味合いがなくなってしまう。一文で後続文の仮定条件を表すときには、「留学するとする」等のように先行文の文末を変えなければならない。しかし、仮定条件を明示するために先行文を「留学するとする」のような仮定的な意味合いが強い文にかえても、「そうすれば日本語を勉強したい」という後文のつながりが、整合しないという点では同じである。

6. 接続助詞「シ」を使って主節末に働きかけの強いモダリティが位置できる場合はある。しかし、その場合、「シ」は同類の要素を並列するという意味関係を表しているのではなく、「シ」で結ばれた要素が主節の理由となるという意味関係を表す場合である。

暗くなってきたし、おなかもすいたし、もう帰ろう。

参考文献

- 相原 林司(1987)「接続語句と文章の展開」『日本語学』9月号 明治書院 pp.37-45
- 市川 孝(1978)『国語教育のための文章論概説』 教育出版
- 井手 至(1973)「接続詞とは何か —— 研究史・学説史の展望 —— 」
『品詞別日本文法講座 接続詞・感動詞』 明治書院 pp.46-88
- 稲葉みどり(1990)「順接・仮定条件文成立のためのモダリティ制約 日本人調査を
通じて」 『ことばの科学』
名古屋大学総合言語センター言語文化研究委員会 pp.67-85
- 加藤 陽子(1992)『複文の従属度に関する考察 接続節・主節のモダリティを中心に
して』 筑波大学地域研究科修士論文
- 川端 義明(1956)「接続関係と関係接続表現」 『国語国文 25-11』 pp.86-99
- 北野 浩章(1989) 「「しかし」と「ところが」 日本語の逆接系接続詞に関する考察
『言語研究』 京都大学
- 甲田 直美(1994)『現代日本語接続詞の構文機能と体系』筑波大学地域研究科修士論文
- 佐治 圭三(1970)「接続詞の分類」『月刊文法』2-12 pp.28-39
- 高橋 太郎(1993)「省略によってできた述語形式」『日本語学』9月号 明治書院
pp.18-26
- 橘 豊(1987)「「接続」研究の現在と問題点」『日本語学』9月号 明治書院
pp.4-12
- 田中 章夫(1984)「接続詞の諸問題 —— その成立と機能 —— 」
『研究資料日本文法 ④修飾句独立句編』 明治書院 pp.81-123
- 塚原 鉄雄(1968)「接続詞」『月刊文法』1-1 明治書院 pp.39-43
- (1969)「連接の論理 —— 接続詞と接続助詞 —— 」『月刊文法』2-2
明治書院 pp.68-74
- (1970)「接続詞 —— その機能の特殊性 —— 」『月刊文法』2-12 明治書院
pp.10-18
- 南 不二男(1974)『現代日本語の構造』 大修館書店
- 宮地 裕(1983)「二文の順接・逆接」『日本語学』12月号 明治書院 pp.22-29
- 森岡 健二(1973)「文章展開と接続詞・感動詞」『品詞別日本文法講座 接続詞・感動
詞』 明治書院
- 横林宙代・下村彰子(1988)『接続の表現』 荒竹出版